事故仮報告

Member　L山本章（E1－Ⅱ）　二俣勇司（L1－Ⅱ）　細野典明（A1－Ⅰ）

当事者　清川雅夫（S1－Ⅰ）　（学部－学年－部歴）

発生場所　屏所立岩　斜上バンド（信大バンド）を約4~5m登った所

発生日時　50年10月9日(木)　AM10:00～10:10頃

発生状況　取付につくと1年目の細野、清川は最初に斜上バンドに登るべく先に、清川TOPで登りはじめた。他の2年は少し遅れて、斜上バンド下のバンドを登ろうとしたがザイルが重なるので清川が抜けるまで待つ事にし、ついでに清川にアドバイスを送っていた。25m位登り、問題の所まで来た。ここまでくればと目を離した時に大きな岩と共に落下。落ちた所は誰も目撃できなかった。

はっきりと

被害状況　清川は頭・腰を強く打ち重態。現在、脳の損傷による意識不明

体の方は回復しつつあるが

のまま信大病院に入院中

発生原因　前から少し浮いていた岩に、必要以上に力を加えたため岩がはがれた。

以上が概要であるが、僕らがこれからしていかなければならない事は、どうしたら第2の清川を出さずにすむかと云う事である。彼が1年目であるという事を重要視したい。他に起こった小さな事故等を合わせて考えるなら、僕らは部の活動を根本から考えなおす必要があると思う。具体的

1. 10月9日に合同岩トレを行ない、具体的な指導を行ない同時に部員の力の把握を行なう。
2. 岩トレに限らず新人指導全体を考えなおす。新人に何を教え、それをどの様に運営していくか、その上で部の山行はどうあるべきか。
3. 11月8日にSACゼミを行ない、全部員への徹底をはかり。
4. L会のあり方に問題はなかったか。　等その他

以上の事を考えて、詳しい報告は11月中頃に出していく予定です。

後、清川君に出来る事として、病院での付添、経済的援助等が考えられ、

対して

それらは確実に行なっていかなければならないと思っています。

No.I

資料

(10/17 吉田)

《現場検証》10/11　L.吉田　山本　二俣　細野

【概要】

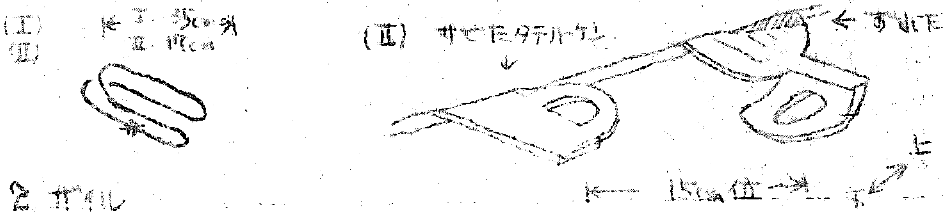
- まず川原から全体を眺めてみる。残置したランニングビレイピンは残っていた。ス側の箇所は落石しているのがはっきり認められる。
- 登攀準備をしている間に清川とヘルメットの落下位置を聞く。
- 吉田(T)—山本で斜上バンド終了点までザイルをfixする。
  - 吉田は清川のセットしたランニングビレーI、II及び落石のあったA地点の状態をみてから末端を終了点の木に結び下へおりる。
  - 山本はもう1本のザイルを体につけ、先に張ったザイルをI、II、IIIで固定する。そして体につけたもう1本のザイルを事故当時のザイルののびた状態にして再現する。
  - 二俣はfixを使ってIIの地点へ、山本はIIIの地点で待機し、ザイルの先にハンマーをつけ落としてみる。2回行ない、ザイル回収。
- その後、清川の落下途中の様子をみるため、B face ダイレクトルート下半を登る。

【個々について】

1. ビレーピン

I……しっかりしたボルトに1m40cmのナイロン編6mmのシュリンゲを(2重にして)かけD型の鉄ビナをかけてあった。

II……少し上へ傾斜したリスに新しい横のウェーブハーケンが1パイに打ち込んであったものにIと同じ様にして90cmのシュリンゲをかけ変Dの鉄ビナがかかっていた。ハーケンはショックで片側から5mm程抜けていた。



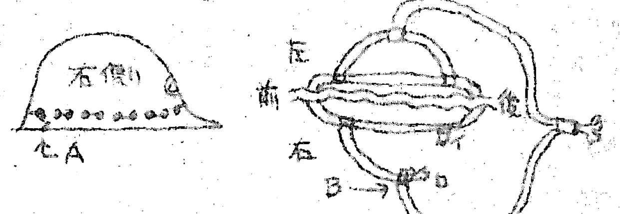
※シュリンゲ ビナ共ショックによる変化なし。

2. ザイル

傷は目立ったものはなく表皮がむけている程度。今回付いたかどうか判断しにくい位。しかし1ヶ所、清川に近い方から8m位の所に比較的目立ったけば立ちがある。

3. ヘルメット

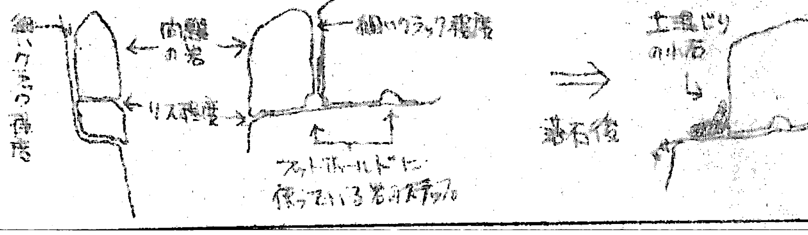
IIの地点のほぼ真下、壁から5m位離れた場所に落ちた。
外側の傷はAのみ。穴とメットの端が割れてつながっていた。
内側について　全体的にヒモは老朽している。右側のイ・ロがちぎれていた。これは次の理由によりちぎれたままかぶっていた可能性がある。(1)イ・ロがヒモの色が少し異う。(2)Bの部分が結んである。
もしそうであればメットのA付近で岩にあたれば(特に「落下予想」の欄で書く様な落ち方をすれば)簡単にメットは前へはずれてしまう。尚このメットは清川が前から使用していた。



【下から見た図】

4. はがれた岩について

前からしっかりした岩でない事は知られていた。高さ1m50cm位、1かかえ以上の岩であった。はがれた跡は土まじりの小石がのっていて付近のすきまにも小石がつまっていた。



図は非常に簡単であり、正確でないがだいたいこんな感じであった。

5. 落下予想

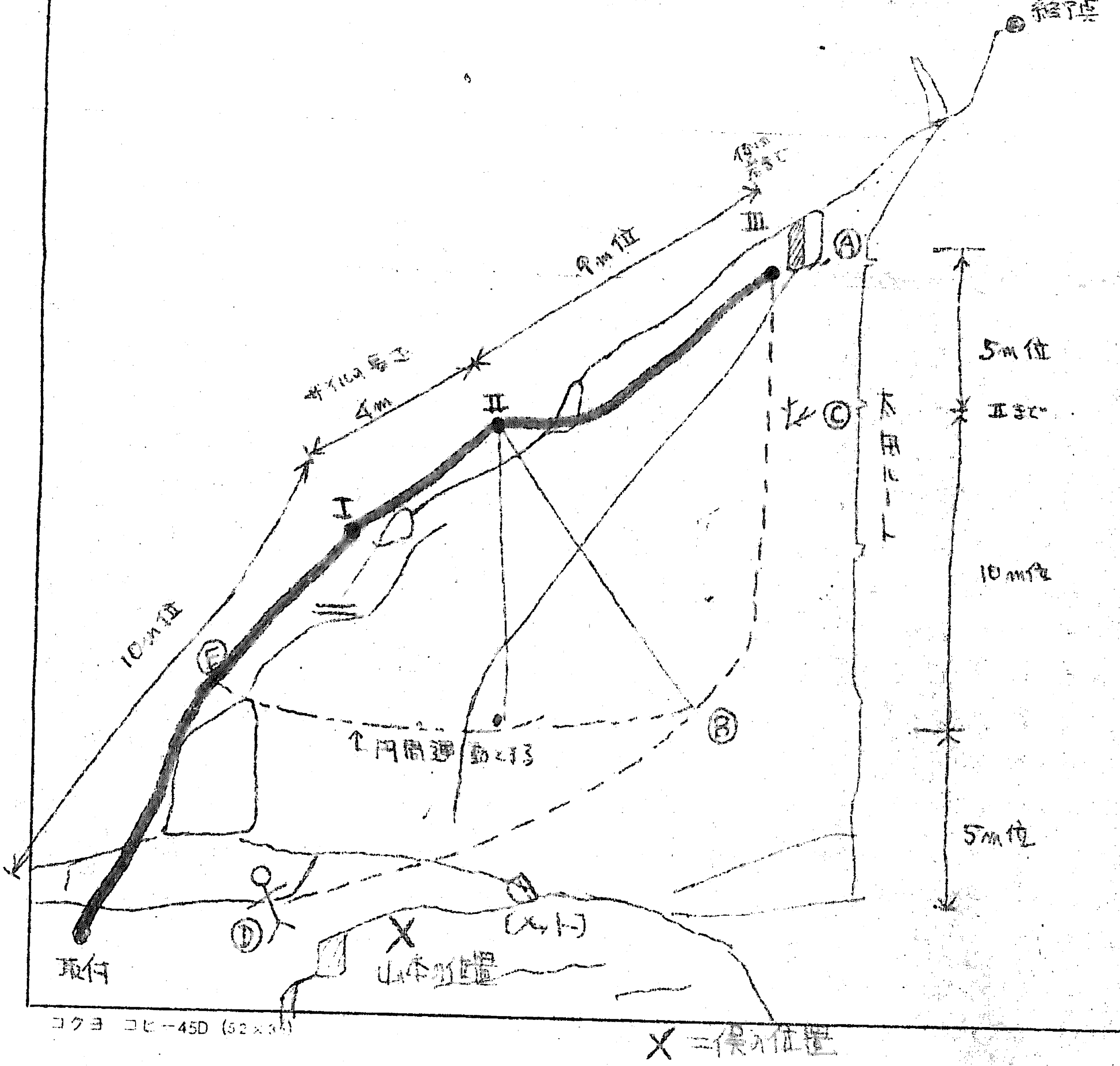
・ハンマーを落とした結果
〔A～B〕真っすぐ下へ　〔B付近〕で岩に当り　〔B～E〕円周運動　E当りまで反動で振れた。
△2回試みEがどちらもB付近で壁に当りE付近で岩をこすった。

・体重をかけていた手の岩が落ちた。→外側へ体は壁から離れた。
・その部分は壁から少しつき出ている。
・Aより下は傾斜も強く、出っ張りもほとんどない。特にB付近から下はのっぺりとしている。
・トンカチはB～Eと動いたが清川はB付近からDへ落ちていった。この間障害物なし。
・細野はザイルを流さなかった。

→清川はAより落下しCのブッシュをかすめB付近までは壁から離れて落下し、B付近よりザイルに引張られB付近の壁に激突し、加速のついた70kg以上の体重の為、ザイルがのびD付近まで振られたと思われる。

メットのはずれ方としては下へ落ちながら壁に当った為、ヘルメットのA付近が先にぶつかり、すぐにはずれその後大きなショックが頭にかかったと思われる。メットは勢いにのって前述した位置まで飛んだと思われる。

6. B face ダイレクトルートを登ってみる。
C付近にあるブッシュは小指位の細さから枝で下の方へおされた跡があり下を少し向いていたがこれが今回の為のものかわからない。他に気づいた事なし。



コクヨ コピー-45D (52×34)

X 二俣の位置

No3

《清川の登攀歴》

5月18日　SAC合同岩トレ

5月25日　廠所　L吉田(4) 二俣 岡本 飯田 山本(2) 清川 矢畑 下田 片山 細野(1)

斜上バンド　T岡本—清川

6月15日　猿岩　L稲島 吉田 古橋 村田 井上(2) 下田 片山 横畑 清川(1)
1.カンテルート　T村田—下田—清川
2.トーフルート　T吉田—清川
3.左ヤムニールート　T吉田—清川

7月夏山　剱・八ッ峰縦走　L須貝(3) 二俣(2) 片山 細野 清川(4)
2.剱 南壁 A1　T須貝—片山—清川
1.剱 六峰 Cfac ~~Ka~~ 剱稜会　T二俣—清川

8月14日　廠所　合同岩トレ(SIMAC)　L吉田　合宿参加者
1.コンタクトルート　T岡田—清川

8月岩場定着合宿
1.A face(ハルマル)　T吉田—片山—清川
2.
3.八峰コンタクト〜A face(ドカンジ)　T須貝 清川 T山

9月28日　廠所　L岡本(2) 清川
ももの木 — 逆V — 上のトラバース下降 — 四角 — 山岳会　連続
(逆Vの前半 T清川　後 T岡本)

9月26日　廠所　L下田 左山(1) 清川 片山 細野(1)
1.ももの木(T左山) — 下のトラバース(T清川) — 逆V(T左山) — 上のトラバース下降(T清川)
— 四角(T左山)
2.コンタクト(T清川) — 山岳会(T左山)

9月30日　廠所　L左山(2) 清川
ももの木(T左山) — 下のトラバース(T左山) — 逆V(T左山) — 上のトラバース下降(T清川)
— 四角(T左山) — 山岳会(T左山)

[redacted]

コクヨ コニ−45D (52×35)